

20100820

袁原 敬

日本における都市計画専門家教育はどうあるべきか？

都市計画の専門家に、今、求められることは、特に、幅広い編集能力。

日本には世界標準の都市計画はない。その穴を埋めると同時に、(キャッチ・アップ的な側面) 今後の世界的な都市計画の潮流をリードする。(リード・オフ的な側面、特に開発途上国との連帯の上で)

これからの世界標準の都市計画の方向性；

1) 物的な計画の部門別の計画や組織を横断的に纏めて、ハビタットのシステム像を紡ぐこと(部門別計画とは；マスタープランの構成要素。ex.カリフォルニアでは7つ)

【システム・エンジニアリング的な仕事】

2) ハビタットの空間像を紡ぐために、地域的な差異を踏まえた個別都市空間像モデルを関係枠にしなから、都市の空間形成誘導を行なう。

【都市デザイン・ランドスケープ・デザイン的な仕事】

3) 雇用、福祉、文化、など、都市活動を支える上で必須である都市計画外の分野の課題を空間的に編集し直すこと(特に、少子高齢化社会では、現行の都市計画に直接関連しない分野での投資や政策が主要課題になる。近隣コミュニティー・レベル、都市圏的な活動などのマルチなレベルで)

【コミュニーナル・マネージメント的な仕事】

4) 田園地域との一体的な生活空間の構成の上で、広域圏における、農林業などの産業分野との連携、治水治水などの安全政策との連携を図りながら、これを一体として紡ぐ、「ランドスケープ・アーバニズム」的な技芸を踏まえて、エコロジカルな枠組みのなかに人間のハビタットを置く、リジョナルな空間像を紡ぐこと

【エコロジカル・プランニング的な仕事】

5) 以上のような仕事を編集すること。

【総合プランナーの仕事】

従って、他の専門分野との連携の下支えをする、コーディネーター的な役割と併せて、空間デザインにかかるデザイナー的な役割の両方を受け持つ必要がある。

この両方の役割を同じ人格の中でこなすのは難しい。ゆえに協働作業が不可欠である。

これらの課題を鳥瞰的に考える専門家、虫瞰的、実践的に解く専門家の双方が必要。